

氏名(本籍)	おお くま あきのぶ 大熊昭信(神奈川県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第1,135号		
学位授与年月日	平成7年12月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	文芸・言語研究科		
学位論文題目	ウィリアム・ブレイクの〈四重の人間〉 —性愛と友愛と犠牲—		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	山形和美
副査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学教授		井上修一
副査	筑波大学教授		森田孟
副査	筑波大学助教授	Ph. D.	今泉容子

論 文 の 概 要

本論文はワープロ・プリントアウト版縦40字×横30行総ページ数364 [400字原稿に換算して約1100枚] (はしがき8, 目次4, 本文328, 注13, 参考文献8, あとがき3) からなる学術論文である。

本論文は、イギリスのロマン派の詩人にして画家ウィリアム・ブレイク(William Blake, 1757~1825)の根本的な思想に肉薄しようという試みである。そこで、ブレイクの考えていた〈四重の人間〉の在り方を、性や人間関係にまつわる思想感情、政治的態度、そして宇宙観などを視野に入れて明らかにすることを目的にしている。

すなわち、各章はそれぞれに〈四重の人間〉の四つの要素が析出されることを確かめるものであるが、その〈四重の人間〉を構成する四つの要素は種々のレヴェルでの解釈が可能で、人間の認識の仕方とか心的能力のレヴェルで考えるならば、それは気概、理性、愛情、想像力というように理解される。この世の苦悩は、墮落した理性としての抑圧的・管理的支配と、それと共謀している墮落した愛としての所有欲が支配していることから生じる。従って、そうした心理的な力から人間が救い出されるのは、想像力が気概や肉体の活力から助力を得て活動を開始するときである、とブレイクは考える。本論文は、こうした主題のパターンが性愛や友愛や犠牲といったレヴェルで見られることを明らかにする。

本論文の構成は以下の如くである—

はしがき

序論 神話の語り手をめぐって

第一章 分魂—ブレイク神話の構成原理

第二章 霊魂の運命—ブレイク神話と世界と体系

第三章 両性具有一性愛と友愛

第四章 啓蒙思想とブレイク

第五章 オルク伝説と四つのゾア寓意

第六章 犠牲を超えて—人類学的想像力と対立の論理

第七章 〈詩霊〉と寓意画的手法

第八章 ブレイクの時空

注

参考文献

あとがき

序論 ブレイクの語り方を論じ、そこに人間の四つの要素が窺えることを述べる。四つの要素とは、日常的な語り、神話的な語り、論理的な語り、それらを相対化するような語りである。このような語りの捉え方は、ポストモダンのブレイク研究の流れに沿っている。そして、大きな問題提起として、ブレイクが神話を創造するようになった動機やそのような語り方をした理由を問う。それに対して著者は、ブレイクは神話でもって悲惨な生を意味づけて、絶対的被害者と言うべき人々の生を救いとうとしていたと解釈する。それは想像力による救いである。この解釈にはいわゆる脱構築やポスト構造主義のブレイク研究と一線を画するものがある。そしてそうした態度は、ブレイクのさまざまな革命的な思想となって現われてくると、著者は考えている。

第一章 そのように形成された神話が、極めて奇怪なものであり、日本の読者にとってばかりでなく欧米の読者にとっても容易に理解しがたいものであることは、つとに知られている。そこで著者は、ブレイクの創造した神話の基本的な原理を文字通り読むことで取り出そうとする。登場人物の勝手な分裂や他の登場人物との合体の中でそれぞれの登場人物を同定する作業は容易ではない。著者はこれを説明するための原理を主として新プラトン主義の靈魂観に見出しながら、登場人物の関係をすっきりと整理しようと試みる。そのとき、この靈魂のなかに四つの構成要素を確認し、それらを〈四重の人間〉の四つの要素として同定するが、これらはそれぞれ想像力、情愛、理性、活力ということになる。この霊体による分魂の解釈はブレイク研究ですでに提示されていたが、体系的に論じたのは著者の前著『ブレイクの詩霊』が初めてであり、本論文はそれを受け継いでいる。

第二章 前章で得られた効果をもとにして、著者は具体的にブレイクの靈魂観を神話世界のなかに探って、それを再構成することを試みる。ブレイクの靈魂観は靈魂と霊体（輝体と二つの幽体）からなっていて、その靈魂はエデンからベウラをへて、ウルロや宇宙卵殻といった中間的な霊界を通して、ジェネレーション（この世）に降下してくるのであるが、その過程のなかで霊体を脱いだり着たりしているというのが、著者の立てた仮説である。ところが、そのようなブレイクの靈魂論の再構成は、一応の成果を上げることができにしても、結局は破綻する。ブレイクが機械的な体系には馴染まないからである。ブレイクにとって厳格や神話体系は、そこから脱出すべきイデオロギーの網の目なのである。そのために、ブレイクの神話体系には、靈魂論といった明確な枠組みを当てはめると、故意にそれを破壊するような要素が混入されていることに気づくことになる。それがブレイクの政治的解釈を目指す思想の、神話の上での現われ方であると考えられるのであり、それを破壊する要素を導入するものこそブレイクの言う想像力であると、著者は見る。

第三章 そうした解放の思想は、もっと具体的に言えば、性や啓蒙主義や犠牲といったブレイクが好んで取り上げる主題群に明確に看取できる。そこでブレイクの性の思想が取り上げられる。まず、ブレイクの描く奇怪な性の多様な在り方を見る。従来指摘されていたフェルマフロデイトスやアンドロギュノスという、同じ両性を同時に兼ね備えている存在の扱い方が要約される。それらは、けっして単に雑然と混在しているのではなく、ブレイクの神話世界の各領域を性的に特徴づけるものとされていることを、著者は確認する。その上で、ブレイクの性に対する肯定的な思想と否定的な思想を見届け、そうした性を越えるものとして、両性具有の存在と、その間に生まれる友愛の思想が導入されている経緯を跡づける。この両性具有の存在こそが想像力を体現した存在であり、雌雄同体の存在が、墮落した愛と理性の合体した存在ということになる。

第四章 ここで著者は啓蒙主義とブレイクの関係を見定める。ブレイクは前近代を批判するのに啓蒙主義を持ちだし、その啓蒙主義の難点を独自のキリスト教神秘主義によって超克しようとしているのが重要なこととして

指摘される。ブレイクの啓蒙主義に対するこうした相反的な姿勢はつとに指摘されているが、ブレイクは啓蒙主義を超克するために神秘主義を持ち出すのではなく、すべてを相対化する論理を駆使したとする論点が新しいと、著者は考える。その論理は肯定や否定でもなく、弁証法的な否定の否定でもない。相容れないものの並存の論理、対立の論理とされている。

第五章 前章での作業の成果に基づいて、ブレイクの、とりわけ初期の小子言書と呼ばれる作品の登場人物の意味するものが検討される。そしてそこに前近代を象徴するユリゼンと革命の象徴としてのオルクの対立を見定めたうえで、それが革命・反革命というように循環していることを確認する。著者は、そこにブレイクが、革命と反革命は同じ悪循環に陥っているということを示していることとみなし、さらにそうした悪循環を脱出するものとして、想像力の化身としてのロスが配置されていると指摘する。

第六章 このような議論を踏まえて、ブレイクが好んで取り上げる犠牲のイメージを考察する。そして社会存続のための必然的なメカニズムとして生け贄の小羊の存在があるというルネ・ジラルールの議論をもとにして、社会の絶対的被害者が依存するとする。性的・人種的・階級的差別によって排除された人々をそうした生け贄の小羊と捉え、それはすでに見た革命的な行動よりも深い次元で人類を規定していると考え。そこで、ノモス、カオス、コスモスといった知識社会学の概念を援用して、それが人間の差別の形態をも規定し、さらには社会変革のメカニズムを規定していることを見る。それは革命の論理を超えた深いものであることを確認する。さらに、それを規定するのが弁証法の論理であるとし、それを超克するものとしてブレイクの対立の論理があると、著者は主張する。著者の大前提は、全体の構造として、この絶対的被害者に対してブレイクがどう考えていたかを追及することにあるが、それが今ここでははっきりと提示されることになる。絶対的被害者は人間の社会の構成の論理そのものの必然として生まれることを、見届けるのである。その上で、それを超えるものとして、許しの論理や、対立の論理が用意されていることを確認する。

第七章 ここではブレイクの寓意画的手法による言語を考える。それは、すでに見た対立の論理がそこに言語と挿画の次元で具体化されているからである。寓意画的手法とは、簡単に言って一定の物語の登場人物や事物にさまざまな抽象的な寓意の説明を挿入することで、一つの文に多層的な意味の世界が現出する事態を言う。この効果は、多層的世界観のすべてを相対化する視点に読者を立たせることにある。さらに、そこに見られる論理が問題である。そのことによって、あれかこれかを選択する否定の論理でもなく、あれもこれも二つながら取り上げる弁証法でもなく、その両者を相対化する論理としての対立の論理の視点が提示されるからである。そうした対立の論理を展開する能力が想像力なのであって、こうしてブレイク神話の背後にある論理が折出されるのである。このような論考を現代批判の流れの中に据えてその意味を考えるのが、本章の主点である。

第八章 ブレイクの対立の論理は、機械論的因果論でも、象徴的因果論でも、構造的因果論でもない、対立の論理から来るところの偶発性の因果論であることが、確認される。ここにこそブレイクの自由の論理的根拠があり、救いの論理があるとされる。まずブレイクの時間と空間の捉え方を考えることで、そうした対立の論理が具体化されている様態を検討する。空間が時間化され、時間が空間化されるところにブレイクの特異な時空が生まれているのだが、それがブレイクの対立の論理の世界なのである。その上で、始めも終わりもない世界で、すべての出来事は書き記されているというブレイクの世界観が揭示される。これはホワイトヘッドの哲学に基礎をおく過程神学思想に類似していると、著者は言う。そして、この地点に立つとき、序章で問題提起された絶対被害者の存在の意味というものが、ブレイク思想のなかですくいとられていることが原理的に理解できると、著者は結論づけるのである。

以上が本論の構成であり、その論理的な展開の概略である。

審 査 の 要 旨

以上概括したように、本論において提起された大きな問題は、ブレイクの神話創造の動機とその手続きである。この問題は言うまでもなく、ブレイク・キャンノンの中核に位置するものであり、ブレイクは神話創造によって、悲惨な生に意味を付与し、絶対的被害者と言うべき人間たちの哀れな生を救いとり、理不尽な社会体制からの解放の方途を探究しようとしていたと、著者は解釈していて、これがブレイクのさまざまな革命的な思想となって、現れてくるというわけである。

著者はまず、このような途方もなく奇怪で、人を容易に寄せ付けないブレイクの創造した神話の基本的な原理を字義通りに読み込む作業を行ない、さらに、神話世界における人物たちに見られる分裂や合体の意味を説明するのに、主として新プラトン主義の靈魂観を援用する。

次の作業は、ブレイクの靈魂観を神話世界の中に探って、これを再構成することである。著者はここで仮説を立てて、ブレイクの靈魂観では「靈魂は、エデンからベウラをへて、ウルロや宇宙卵殻といった中間的な霊界を通して、ジェネレーション（この世）の降下してくるときに霊体を脱いだり着たりする」と述べている。その検証の例として『天国の門』を取り上げて、靈魂観のモデルの有効性を確認している。ここでの霊体観は独自のもので、したがってこの『天国の門』の解釈も独創的なものになっている。

しかし、ここでも重要なことは、このようなブレイクの靈魂論の再構築作業が結局は整合性を失ってくるということであり、これを認識する著者の感覚は鋭い。神話体系そのものは結局は社会の支配的制度のヘゲモニーを意味し、ブレイクはそれから人間が解放されるべきものと考えていたということである。これは一種のアポリアであるが、それを十分に知りながら取って神話創造に向かったブレイクの特異性は当の神話そのものの性格を雄弁に告げているとともに、ヨーロッパにおける開放という発想の原点を暗示しているとも思われる。著者はそこに重大な問題系を見ているようである。

そのような解放の思想は、性や啓蒙主義や犠牲といったブレイクが好んで取り上げる主題群にはっきりと根を張っている。ブレイクの描く奇怪な性の多様な在り方、とくにフェルマフロディトスとアンドロギュノスという両性を具有した同じ存在の扱い方が興味深くなってくる。著者は、この存在性がむしろブレイクの神話世界の各領域を遍在的に性的次元で特徴づけていることを実証する。そして、性を超える両性具有の存在と、その間に生まれる友愛の思想が導入されている経緯を跡づける著者の姿勢は注目に値する。このように、ブレイクに見られるヘルマフロディトスの否定的なイメージに対して、アンドロギュノスの肯定的なイメージを配してブレイクの性の思想を著者は再確認している。

啓蒙主義とブレイクの関係について言えば、ブレイクは前近代を批判とすると啓蒙主義を持ち出すが、しかし啓蒙主義の難点を彼独自のキリスト教的神秘主義でもって超克しようとしているという著者の指摘は貴重なものである。ついで、ブレイクの、とりわけ初期の小予言書と呼ばれる作品の登場人物の意味するものを検討する際に、前近代を象徴するユリゼンと革命の象徴としてのオルクの対立の中に革命と反革命の循環を確認しているところが興味を引く。この循環からの脱出を目指したこともいかにブレイクらしいが、それを成就するものとして想像力の化身としてのロスが配置されていることを著者が指摘していることは、注目に値する。

では、ブレイクが好んで取り上げる犠牲のイメージはどうだろうか。ここで著者は、社会存続のための必然的なメカニズムとして生け贄の小羊の存在があるというルネ・ジラルールの発想を援用して、社会の絶対的被害者の必然的な存在を肯定している。それを規定するのが弁証法の論理であり、それを超克するものとしてブレイクの対立の論理があるというように、著者は理解している。

ブレイクといえ、その寓意画的手法になる可能性を持つ言語という問題を避けるわけにはいかないが、ここで言う寓意画的手法とは、物語の登場人物や事物にさまざまな抽象的な寓意の説明を挿入することによって、一つの文に多層的な意味の世界が現出する事態のことである。しかし二者択一的な手続きでもなく、二つながら取

り上げる弁証法でもなく、その両者を相対比する論理としての対立の論理の視点をヴィジョンとして、著者はそれを効果的に記述している。このように、弁証法と対立の論理の関係を相容れない二つの論理として提示し、対立の論理を救いの論理とし、神義論を超えようと試みたのは本書が初めてであると考えられる。

最後に著者はブレイクの時間と空間の捉え方を対立の論理の具体化の様態として検討する。結局は、空間が時間化され、時間が空間化される場所にブレイクの特異な時空の形而上学が育まれているという発想であるが、その中に著者は、始めも終わりもない、あらゆる出来事が記録されているブレイクの世界を観て取るのである。ここで、序章で問題提起された絶対的被害者の存在の意味というものがブレイクの思想の中で究極的にすくいとられているという理解によって本論文はいわば円環を閉じるのであるが、このようにブレイクの思想の根本に過程神学を持ち込んで、それがブレイクの救いの思想の根底にあったとする見解は、著者の独創であると考えられる。

著者がブレイクの謎めいた詩編の虜になってはや三〇年になろうとしている（著者にはすでに『ブレイクの詩霊』という著作がある）が、この間、ブレイク神話の再構築を目指して、いくつかの発見をしたと自負している。こうした結実を踏まえた本論文の特徴は、ブレイクの神話に見られる民俗学的な要素に着目して、そこに一定の論理構造を取り出したことにあり、これはブレイク学にのみ止まらない意義があると考えられる。著者のブレイク研究はノースロブ・フライの実績（*Fearful Symmetry: A Study of William Blake*, 1947）を継承するものであっても、ヴィクター・ターナーの人類学を援用しつつ、それを新しい枠組みで超克しようとするものである。ターナーの根底にある弁証法的な論理そのものを超克するものとしてブレイクの対立の論理を見ていて、その論理こそがブレイクの啓蒙主義や性や犠牲についての思考の根底にあるという著者のたどりついた認識は内外のブレイク学に新しい地平を拓くものと、判断される。

新しいブレイク学のみならず、近年の文学・文化次元のあまたの業績を取り込みながら（ただし例えば近年のフェミニズム批判の業績は一部しか取り入れていない）、複雑で難解なブレイクの世界に、とくに〈四重の人間〉像のこみ入った細部に鋭い切り込みを入れて、その世界を統一的に記述しようと試みた（統一化は結局は十分には達成されていないとする批判も出されたが、一方そうなる必然性はブレイクの世界そのものにあるとする弁護もなされた）、これほどに浩瀚な著書は希有なものであり、今後のブレイク研究に計り知れない寄与をなすものと確信する。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。